

房総の曽利式系土器 —加曽利E 3式に伴う斜行文・重弧文土器を中心に—

大内千年

【概 要】

房総半島で出土する「曽利式系土器」は、加曽利E式に伴う非在地的な土器として古くからその存在が認識されていた。1980年代より、房総各地の開発に伴う発掘調査で出土した曽利式系土器に対し、時間的な位置付けが試みられてきた。演者は、2009年に房総で出土する曽利式系土器の集成的な研究を公表し（大内2009）、2012年に房総の曽利式系土器の時間的な位置付けについての見通しを示したところである（大内2012）。近年、遠隔地で出土する曽利式系土器への関心の高まりから、2021年に山梨県考古学協会による「曽利式土器とその周辺」に関する研究集会が開かれ、その中で、房総で出土する曽利式系土器についても改めて集成が図られた（小林・箱石2021）。近年の資料増加により見直しが必要な部分があるものの、2009年に演者が示した房総の曽利式系土器に関する大枠としての方向性について、大きな変更を迫られることはないようであった。ただし、房総の曽利式系土器の時間的な位置付けについては、課題が残るとされた。本講演では、房総の曽利式系土器の中心である「斜行文・重弧文土器とその類例」について、近年出土した資料を含め、その時間的な位置づけ等について、再度確認してみたい。

1 曽利式と房総の曽利式系土器について

- (1) 分布の中心域外で出土する曽利式系土器について
- (2) 房総の曽利式系土器

2 房総における曽利式系「斜行文・重弧文土器とその類例」

- (1) 集成状況と分布
- (2) 出土状況
- (3) 時間的な位置づけ
- (4) 組成について
- (5) 胎土分析の結果について

3 房総における曽利式系「斜行文・重弧文土器とその類例」の意義

○南西関東よりも、盛行する時期が確実に遅れる。

同様の顔付きをした土器が、時間的な同時性を示さない可能性がある。

○房総においては「加曽利E 3式前半」の枠組みを保証するもの。

加曽利E 3式前半と「加曽利E III式」の画期を確実にするもの。

○加曽利E 3式前半の細別の可能性について（市原市中潤ヶ広遺跡での分析事例から）

編年的枠組み（大内2009）

加曽利E 1 式	≡	新地平編年 10 a ～ c 期	
加曽利E 2 式	≡	新地平編年 11 a ～ c 期	
加曽利E 3 式前半	≡	新地平編年 12 a ・ b 期	
加曽利E 3 式後半	≡	新地平編年 12 c 期	≡加納・加曽利E III式古段階
加曽利E 4 式	≡	新地平編年 13 a 期	≡加納・加曽利E III式新段階・E IV式

参考・引用文献

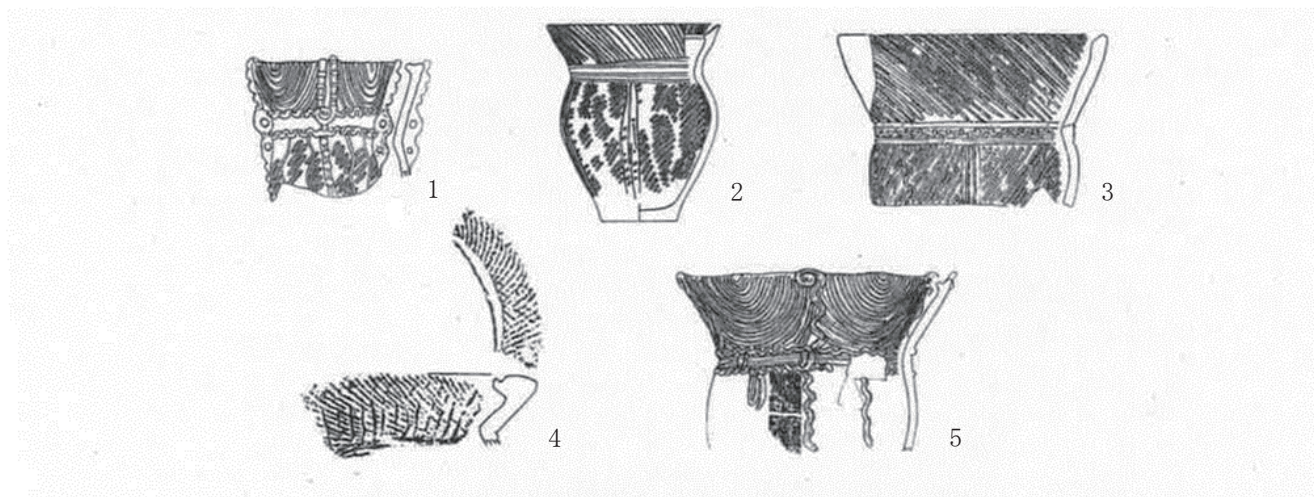
大内千年 2006「第6章第1節縄文時代」『潤井戸地区埋蔵文化財調査報告書Ⅱ－市原市中潤ヶ広遺跡（上層）－』千葉県教育振興財団

大内千年 2008「千葉県における小規模集落の分析－中期後葉土器編年に関する補足・市原市中潤ヶ広遺跡の事例を手がかりに－」『縄文研究の新地平（続）～堅穴住居・集落調査のリサーチデザイン～』六一書房

大内千年 2009「中期の非在地系土器－房総半島におけるいわゆる曽利式系土器について－」『研究紀要』26 千葉県教育振興財団文化財センター

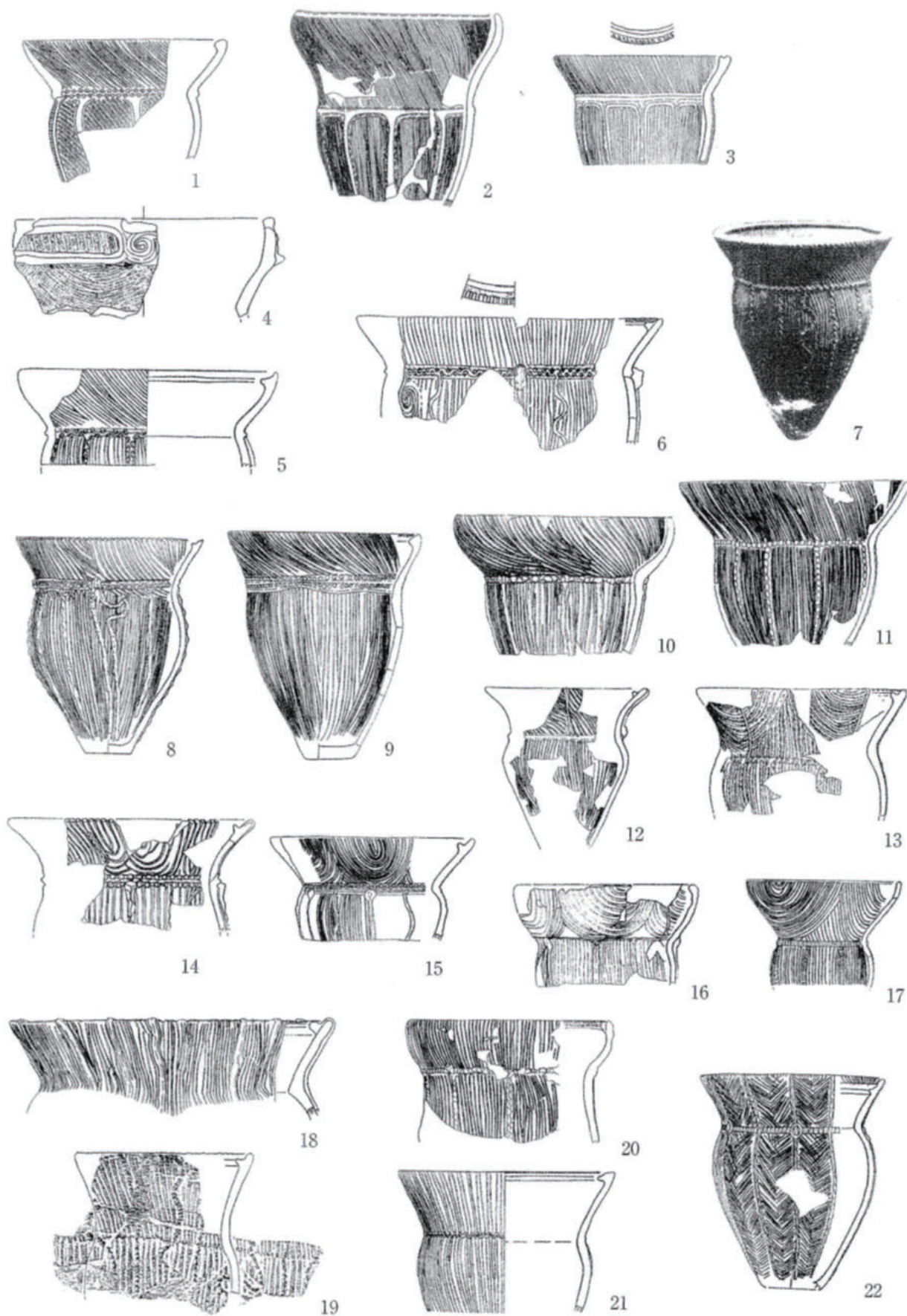
大内千年 2012「房総半島における非在地系土器について－縄文時代中期後葉の曽利式系土器のあり方－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第167集

小林美貴・箱石幸祐 2021「千葉県における曽利式（系）土器集成」『曽利式土器とその周辺』山梨県考古学協会



1：市原市草刈 2・3：南房総市深名（深名瀬畑） 4・5：木更津市伊豆山台

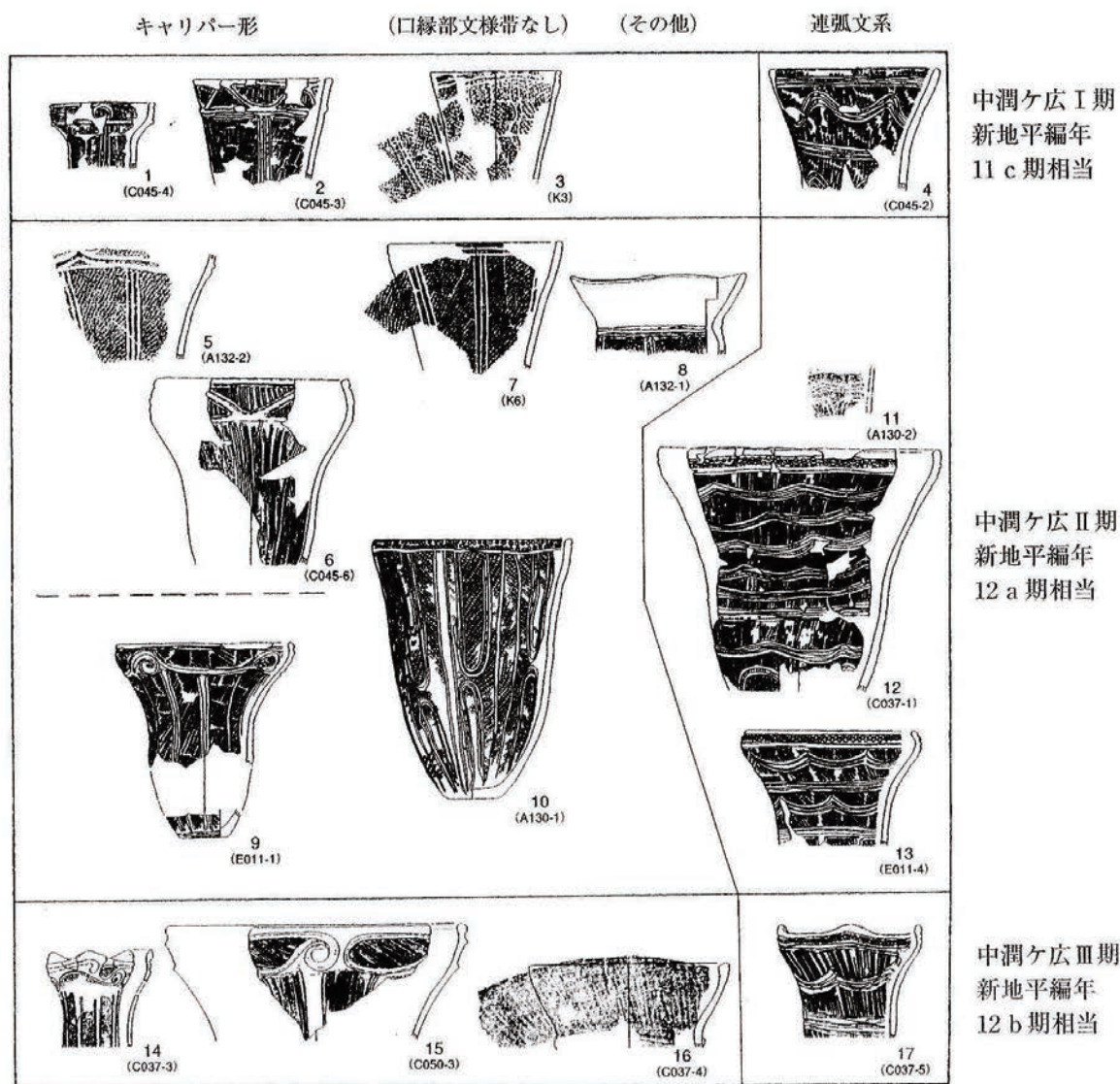
第1図 加曽利E 2 式期の「斜行文・重弧文土器とその類例」（大内2012図1を改変）



第2図 加曾利E3式前半の「斜行文・重弧文土器とその類例」(大内2012図2)

(第2図 出土遺跡名)

1・5・6・22：松戸市子和清水 2・11：木更津市台木 A 3・8・21：市原市草刈 (B 区) 4：佐倉市
吉見稲荷山 7：市川市寒風台 9・19：銚子市栗島台 10：市原市下鈴野 12：四街道市上野
13：横芝光町東長山野 14：四街道市和良比 15：千葉市有吉北 16：市原市野口 (海保野口)
17：市原市馬立塚ノ台 (土宇) 18：四街道市中ノ尾余 20：千葉市大膳野



第3図 市原市中潤ヶ広遺跡における仮設時期設定 (大内 2006 → 大内 2008 第1図)